

翻
訳

Charlotte M. Brane 著『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その30)

堀
啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載三十回目となるこのたびは、第三十八章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】【課題番号：24K0367021】による研究成果の一部である。

三十八章

リアン・アールは決して悲劇の女王を気取ることにはなかった。彼女が自己犠牲や死について語る事はなかったが、その落ち着いた優しい性質には、他の人々にはほとんどない強い忍耐力があった。彼女は自分がどれほどライオネル・ダッカーを愛していたか——ど

れほど全ての思いと希望が、彼と共にあったのか、決して認めてはいなかった。彼女が彼に好意を持ち始めてからと言うもの、彼なしの人生がどのようなものだったのか、はつきりと想像した事はなかった。

姉の犠牲の上に自分を助けたいなどは、思いもよらないことだった。あの秘密は——彼女に託され、彼女はそれは暴露しようなどとは思ってもよらなかった。もしも死ぬことと、ベアトリスを裏切ることの二つの選択肢が彼女に与えられたのであったならば、単にそうすべきものだという意識から、彼女は死を選んだだろう。

だから、ライオネルが、あのひどい言葉を投げつけたとき——自分が彼に見られたことに気がついたとき——咎められることから、逃れようなどと決して思わず、そして、姉の過失について語ろうとも思わなかった。彼の言葉はとても残酷であった。その言葉は鋭い痛みとともに彼女を貫いた。あの親切的正直な顔に、軽蔑や嘲りが

表れるのを彼女は見たことがなかったが、彼女は今しがたその両方を彼の表情に読みとった。だが、彼女に何ができたであろう？ 姉の人生は彼女の両手に握られており、彼女は姉の人生を守らねばならないのだ。

それゆえ、彼女は残酷な詰責に耐えていたが、ただ一度、彼を失ってしまうことへの恐怖の苦しみから慈悲と信頼を求めて叫んだ。だが、彼は信じてはくれなかった。彼は厳しい言葉で、彼女の優しい心を刺し貫いた。そしてその熱した怒りで、彼女に焼きごてを当てた。彼女は他の人物の犠牲の上に全てを説明し、今まで以上に彼に敬意を払わせることができたかもしれないが、彼女はそうはしなかった。

彼女は己に降ってきた悲しみに、ただ驚くばかりだった。彼女は、気高く昂然と頭を上げて振る舞いながら居間を後にしたが、ベアトリスが真実を語ることを許してくれない限りは、再び彼に会うことができないことを悟っていた。彼女はまっすぐに姉の部屋に向かい、姉を待っていた。

青ざめた顔は、落ち着いて静かだった。全てを語ったならば、姉が彼女の頼みを拒絶できるはずがなかった。そうすれば彼女はライオネルに説明を書き送ることができるはずだった。彼は、アールズコートを去ることもなくなり、彼女のゆるぎない真実のゆえに、より一層彼女を愛するはずだった。

「シュゼットを下がらせて。」と、彼女は、ベアトリスが入ってきたときにささやいた。「あなただけにすぐに話したいのよ。」

ベアトリスは、メイドを下がらせて、妹に向き直った。

「どうしたの、リリー？」と彼女は尋ねた。「あなたは真つ青よ。何があつたの？」

「ベアトリス」とリリアンは言った。「あなたの秘密をライオネル・ダッカーに話すことを許してくれない？ これは彼にとって大切な問題なの。」

「ライオネル・ダッカーに！」と彼女は叫んだ。「嫌よ、たとえ千回も頼まれようとも！ よくもそんなことが聞けたわね、リリー？ 彼は、エアリー卿の友達で、その秘密を守ることにはできないでしょう。どうしてそんなとんでもないことを私に尋ねたりするの？」

「彼は今夜、私を見ていたの。」と彼女は答えた。「彼は庭に出ていて、私がヒュー・ファナリーに話をしているところを見ていたの。」

「あなたは彼に何か話した？」と彼女は尋ねた。しばしの間、ベアトリスは絶望しているように見えた。

「一言も。」とリリーは答えた。「あなたが私を信じてくれているのに、どうして私がそんなことができるの？」

「正しい判断ね。」と、姉は言った。そしてその表情に安堵の色が広まった。「彼の意見はそれほど重要ではないわ。彼は何て言ったの？」

「彼は、私が、私自身の知り合いの誰かに会おうとしたと思っているみたい。」彼女は恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら答えた。

「それは間違いなく、大変なショックだったでしょうね」と、ベアトリスが先を続けた。「ねえ、でも気に病まないで。起きてしまったことはとても残念に思うけれど、大した問題ではないわ。私はもうすぐ自由に、そして幸福になるの。私はこんなことを悲しむことはできないわ。どうして彼が話さないと確信できるの？彼は隠し事をするには誇り高すぎるのではないかしら。」

「ええ。」とリリアンは、夢見るように言った。「彼は話したりはしないわ。」

「それならそんなに怯える必要はないわ、リリー。何の問題もないわ。」

「あなたは、彼が私をどう思うかを忘れてるわ。」とリリアンは言った。「あの正直な、誠実な性格から見て、彼が私をどう思うかしら？」

この観点からの質問は、ベアトリスにとってはさしたる問題では

なかった。彼女は真剣で心配そうに見えた。妹が誤解されると言う事はあるべきことではなかった。

「まあ、ごめんなさい。」と彼女は言い始めたが、リリアンが割って入った。彼女は姉に近づき、青ざめた表情で首を垂れ、姉の腕に伏せた。

「ベアトリス」と彼女はゆっくりと言った。「彼に話させてくれなければ。彼は私のことを好きでいてくれる。彼は私を愛している。私は彼の妻になると約束し、私も彼を愛している——ちようど、あなたがエアリー卿を愛しているように。」

その言葉にショックを受けて、ベアトリス・アールは黙って動きを止めて座っていた。

「私は彼を愛しているの。」とリリアンは続けた。「私は話していません。彼はあなた方が結婚してしまうまで話すべきではないと言ったの。私は彼をとて深く愛しているの、ベアトリス——そして彼に、私が会っていた人は誰かと尋ねられたとき、私は答えることができなかった。彼はとても怒ったわ。彼は、鋭い残酷な言葉を私に投げかけた。そして私にはそれがどれほど大きな誤解なのか、語ることはできなかった。彼は、アールズコートを去るわ。私が全てを彼に話さない限り、彼は二度と私の顔を見ないでしょう。彼はそう言ったし、自分の言葉を守るでしょう。ベアトリス、私は愛を失わなければならないの？」

「しばらくの間よ。」と彼女は答えた。「こんなに利己主義な自分自身が嫌になるわ。でも私は、ライオネル・ダッカーを信じることはできないわ。彼はあまりにも性急で、短絡的で、彼がそれを知ったならば、必ず私を裏切るわ。自分は秘密を守ることができないから、自分も秘密を持たないのが楽だ、とこの間、彼が話していたのを忘れたの！」

「彼は、この秘密は守るわ」とリリアンは嘆願した——「あなたと私のために。」

「無理だわ」と、ベアトリスは言った。「そして私は自由と幸福を、本当に目前にしているの。ああ、リリー、あなたは、かつて一度、私を救ってくれたわ——どうか、もう一度助けて！ねえ、私が結婚するまでこの秘密を守って。そうすれば、私自身が誇りを以てライオネルに、全てを書き送ると誓うし、彼はあなたを倍も愛するでしょう。私のためにそうしてくれないかしら？」

「それは彼にとってフェアではないわ——彼は、私の信頼に対する権利があり——私にとってもフェアではないわ、ベアトリス。」

「私たちのどちらか一人は犠牲にならなければ」と姉は答えた。「もし私が犠牲になれば、その犠牲は生涯続くでしょうし——私は死んでしまうでしょう。もしあなたがなければ、長くても、三、四週間の辛抱だわ。私はライオネルに自分の結婚式の当日に手紙を書いて

送るわ。」

「なぜ、その時なら良くて、今は彼を信じられないの？」とリリアンが尋ねた。

「だって一旦、エアリー卿と結婚してしまえば、私には何も怖いことがないもの。姉の幸せのために、自らの三、四週間の幸せを諦めることはそれほど大変なことではないでしょう、リリー。私はこれ以上何も言わないわ。あなた自身が決めて。」

「嫌だわ、そんなふうにしないで。」とリリアンは、苦悩に押しつぶされそうになりながら言った。「あなたの犠牲の上に、身の潔白を明かすことなんかできないわ。」——そしてこの状況は、ベアトリスが完璧に把握していたものだった。

「だったら、このままにしておいて。」と姉は言った。「いつか、あなたが私のためにしてくれたことに、私はきつと感謝することができる——でも、今はできないの。私の結婚式の日に、私はライオネル・ダッカーに、彼が愛している女性は、世界で最も誠実で高貴で愛しい存在だということを話すわ。」

「それは私が良いと思う判断とは違っているけれども。」とリリアンは答えた。

「私の良心や判断や愛や全てのことに反しているわ。」と、ベア

トリスは付け加えた。「でも、そうすれば、恐ろしい破壊と悲しみから私は救われるわ。そして、そうすればあなたも傷つかないでしょう、リリー、あなたにとつても良いことであつて、毒にはならないわ。さあ、このことを忘れて。彼はあなたにどうやって罪滅ぼしをしたら良いのかわからないでしょう。彼が戻ってきたときのあなたの幸せを考えて。」

彼女は自分の肩にもたれかかっている、決して魅力の衰えない金髪の頭を抱え上げて、妹がすべての異論に打ち勝つまで話をし、抱きしめていた。

けれどもその夜、長い間、美しい金髪の頭は枕の上で弱々しくもたげられては、あちらこちらと動き——綺麗な顔は、苦しみの涙で汚れていた。ライオネル・ダッカーは、彼女が自分のもとに来て、全てを話すからここにいて欲しいと懇願することとを、最後の瞬間まで半ば望み、去りかねていた。

しかし、最後の瞬間が訪れ、望んでいた言葉を伝える、リリアンからの使者は来なかった。彼は、館を出た。彼は、彼女の部屋の窓を一度振り向くことを止められなかったが、ブラインドは固く閉ざされていた。彼は、自分が戻ってくるができるような状況も、理由も、夢にも知らず思いつきもしなかった。

木曜日の朝焼けは明るく美しく、あたかも夏の輝きを秋が超えたいと願っているかのようなだった。ベアトリスは、いつヒューに会い

に行くことになるのか、リリアンには告げていなかった、それは妹の心配を恐れたためでもあり、彼とどれぐらいの時間一緒にいるかを誰にも知られたくないためでもあった。と言うのも、ベアトリスはこの辛い会見を心配してはいるものの、ただ最終的には自分が勝利すると確信していたからだだった。

リリアンは体調が悪く、起き上がることができなかった。慣れない感情と、心の負担があまりにも大きいためだった。レディー・ヘレナは、メイドの話を聞くと、孫娘の元に行き、起き上がることを止めた。そしてリリアンはあまりにも苦しみすぎていて、喜んでその制止に従うだけだった。

朝食の集まりは少人数になった。アール卿は不在だった。彼はホルトを訪れていた。レディー・ヘレナは、リリアンのそばに座るために急いで朝食の間を離れた。エアリー卿は、届けられた小さな謎めいた包みを見て、とても幸せそうに微笑んでいた。彼はベアトリスと一緒に出かけたくないかと——見せたいものがあるからと頼んだ。彼らは昼食には間に合うように、庭園のほうへと出て行った。

この朝は、明るく静かだった。夏の暖かさや美しさをまだ少し残しつつも、地面には落ち葉が広がっていた。

エアリー卿とベアトリスは、深く静かな湖のきらめきが遙かに見える、大きな杉の木の下に腰を下ろした。鳥たちは彼らの周りで歌い、太陽の明るい日差しが降り注いだ。ベアトリス・アールの美しい

い顔には、ただ幸福と愛情だけが読み取れた。

「あなたに差し上げたいものがあるのです、ベアトリス。」と、エアリー卿は言って、彼女に小さな包みを見せた——「サプライズです。この中に入っているものが、あなたにとつてこの世の何よりも大切なものになるとおっしゃって、私に感謝してくださいさなければなりませんよ。」

彼女は美しい箱を開けた。その中には、素晴らしい造りの精巧な金鎖と、壮麗で美しいロケットが入っていた。

彼女は驚きで小さな声を上げ、このプレゼントを、手に取った。

「さあ、感謝してくださいね。」とエアリー卿は言った。「私がお願いした方法で。」

「この中にあるのは、この世の何よりも私には大切なものです。」と彼女は言った。「あなたはご存知ではありませんか、フルベルト。なぜまた私に繰り返させるのです?」

「なぜなら、私が聞きたいからです。」と彼は答えた。「私は誇り高い私の恋人が、ほんの短い間、謙虚に見える様子を見ていたのです。私は、誰も飼ひ馴らすことができなかった美しい野鳥を私が籠に入れられたと、知りたいのです。」

「私はまだ籠に入れられてはいませんわ。」彼女は反論した。

「ベアトリス」とエアリー卿は言った。「約束してください。このロケットをあなたの首につけさせてください。そして夜も昼も一瞬たりとも、我々の結婚式の日まで、あなたはこれを外さないと言ってください。」

「簡単なことですよ。」と彼女は言った。彼女は美しい頭をかがめ、エアリー卿は鎖を彼女の首につけた。

自分が何をしてしまったのか、彼はほとんど気づかなかった。エアリー卿がその鎖を、彼の愛するこの女性の首に巻いたとき、彼は彼女の生と死を自分に結びつけてしまったのだ。

「綺麗ですね。」と彼は言った。「あなたのそばにあれば、すべてのものがどんなに美しくなることでしょう。ベアトリス! あなたは生まれながらの女王で——そんなあなたを手に入れられた。私は一体何者なのでしょう? もう一度おっしゃってください——決して聞き飽きる事はありませんから——私を愛してくれますか?」

彼女は、幸福に輝く表情で、もう一度彼に告げた。彼は身がかがめて、この美しい顔に口づけた。彼は白く華奢な両手と、風が気まぐれに、彼のそばまでなびかせた濃い色の巻き毛にもキスをした。

「木の葉が緑色に色づき、美しい春が訪れたなら」と彼は言った。

「あなたは私の妻になるのです、ベアトリス——リントンのレディー・エアリーに。あなたがこの名を共に名乗ってくださいることを思い出すたびに、私は自分の名前と爵位を好きになります。そしてあなたは、今までで最も幸せなレディー・エアリーになり——この太陽のもとで最も幸せな花嫁、最も幸せな妻になるでしょう。私のロケットと決して離れないでしょうね、ベアトリス？」

「はい。」と、彼女は答えた。「決して。ずっとこれを身に付けて参りますわ。」

彼らは、杉の古木の陰で、長い楽しい時間を共に座って過ごしたが、その間、リリアンは頭と心に痛みを感じながら、彼女らしい優しい気質から、なぜこんな悲しみが自分に降りかかってきたのかを考えていた。

青ざめて、引き裂かれた百合の花のように横たわっている彼女は知らなかった。何年も前、向こうみずで血気盛んな青春時代の彼女の父が、意図的に、彼の父親を欺き、その願いと命令に背いて結婚したことを。そして彼女は知らなかった。この不幸な結婚が、プライドと情熱と愚かさで嫉妬の中でどのように終わったか——そしてこれに耐えようとした夫婦がどのように袂を分かっていったか——誇り高い焦燥した夫は、家庭とそこにまつわる義務をすべて放棄して外国に行き、嫉妬深く怒りに満ちた妻は、心の苦しみから彼女自身を隠棲生活へと閉じ込め——共に、彼らの元へと神から差し遣わされた、子供たちをないがしろにしてきたことを。そして彼女は知

っていた。彼女らのうちの一人が、どのように間違いを犯そうとしているかを。そして彼女は知っていた。偽りや悲劇や悲しみが過ちに付随していることを。彼女はこの主なる犠牲者となったが、この罪は彼女自身のものではないのだった。

激しく反抗的な感情は、彼女の優しい心にはなく、苦悩と祝福を同じように与える神の采配に対して、怒り抗う気持ちもなかった。風に押し曲げられている花でも、これほど従順ではなかっただろう。悲しみと愛とが投げ与えられた時、彼女はそれらを受け入れ、ただ静かにその苦しみに耐えていた。そしてその間、もはや愛しはしないと自ら告げながらも忘れ得ない、あの若い女性のそばから、できるだけ離れていくことだけを願い、ライオネルは、休むことなく旅を続けていた。

(以下、次号)

Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』(翻訳・その30)

翻 訳

Charlotte M. Brame 著 『ドラ・ソーン (Dora Thorne)』
(翻訳・その30)

堀 啓子

A Translation of *Dora Thorne* by Charlotte M. Brame ③⑩

HORI Keiko